にごりえ

樋口一葉

青空文庫

一

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だらう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯なら帰りにきつとよつておくれよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ来る気もない癖に、本当に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて閾をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい焼棒杭と何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私しには技倆が無いからね、一人でも逃しては残念さ、私しのやうな運の悪るい者には呪も何も聞きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとんとんと土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸もとばかりの白粉も栄えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すぱすぱ長烟管に立

膝の無沙法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の裕衣に引かけ帯は黒繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて言はずと知れしこのあたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの髷の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと気のない返事をして、どうで来るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つてゐるに、大底におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来る物かな、そしてあの人は赤坂以来の馴染ではないか、少しやそつとの紛雑があろうとも縁切れになつてたまる物か、お前の出かた一つでどうでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうもあんな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやういいへば、あきれたものだのと笑つてお前などはその我ままが通るから豪勢さ、この身になつては仕方がないと団扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

　店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り塩景気よく、空壜か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる処もみゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶椀むし位はなるも道理、表にかかげし看板を見れば子細らしく御料理とぞしたためける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や

商売がらを心得て口取り焼肴とあつらへに来る田舎ものもあらざりき、お力といふはこの家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まま至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際ては存の外やさしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、ああ心とて仕方のないもの面ざしが何処となく冴へて見へるはあの子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近来まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ。

お高は往来の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて気にしてもゐまいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ねへさうではないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、搆ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかかるのだがお前のはそれとは違ふ、了簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は気位が高いから源さんと一処にならうとは思ふまい、それだもの猶の事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうからあの子僧に使ひやさんを為せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮ばかり申て

なる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるからいけないともかく手紙をやつて御覧、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に余念のなきか俯向たるまま物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら気をつけておくれ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手伝ひを情夫に持つなどと考違へをされてもならない、それは昔しの夢がたりさ、何の今は忘れてしまつて源とも七とも思ひ出されぬ、もうその話しは止め止めといひながら立あがる時表を通る兵児帯の一むれ、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相変らず豪傑の声がかり、素通りもなるまいとてずつと這入るに、忽ち廊下にばたばたといふ足おと、姉さんお銚子と声をかければ、お肴は何をと答ふ、三味の音景気よく聞えて乱舞の足音これよりぞ聞え初ぬ。

二

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉らずんばこの降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、どうでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六畳に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれてその次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、

平民かと問へばどうござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあさうおもふてゐて下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無左法な置つぎといふが有る物か、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の左法、畳に酒のまする流気もあれば、大平の蓋であほらする流気もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよいよ面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄ましい物語があるに相違なし、唯の娘あがりとは思はれぬどうだとあるに、御覧なさりませ未だ鬢の間に角も生へませず、そのやうに甲羅は経ませぬとてころころと笑ふを、さうぬけてはいけぬ、真実の処を話して聞かせよ、素性が言へずは目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりまし よ天下を望む大伴の黒主とは私が事とていよいよ笑ふに、これはどうもならぬそのやうに茶利ばかり言はで少し真実の処を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと真に成つて聞かれるにお力かなしく成りて、私だとて人間でござんすほどに少しは心にしみる事もありまする、親は早くになくなつて今は真実の手と足ばかり、こんな者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ませぬ、どうで下品に育ちました身なればこんな事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感があふれてあだなる姿の浮気らしきに似ず一節さむろう様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さむではあり、一

足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、それともそのやうな奥様あつかひ虫が好かでやはり伝法肌の三尺帯が気に入るかなと問へば、どうで其処らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、来いといつて下さるお人の気に入るもなし、浮気のやうに思召ましようがその日送りでござんすといふ、いやさうは言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言伝たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、ああ貴君もいたり穿索なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへツこ、書けと仰しやれば起証でも誓紙でもお好み次第さし上ませう、女夫やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人もちなら主人が怕く親もちなら親の言ひなり、振向ひて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、それなら廃せとてそれぎりに成りまする、相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る辺なげなる風情、もうこんな話しは廃しにして陽気にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を扣いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が来るに、おいこの娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が来るに焔魔様へお参りが出来まいぞと笑へば、それだとつて貴君今日お目にかかつたばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとしてゐましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景気、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商売を当て見ませうかとお高がいふ、何分

願ひますと手のひらを差出せば、いゑそれには及びませぬ人相で見まするとて如何にも落つきたる顔つき、よせよせじつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、かう見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員様がありますものか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒賞だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失礼をいつてはならないこのお方は御大身の御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商売などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲団の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、みなの者に祝義でも遣はしませうとて答へも聞かずずんずんと引出すを、客は柱に寄かかつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大底におしよといへども、何宜いのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の払ひを取つて残りは一同にやつても宜いと仰しやる、お礼を申て頂いてお出でと蒔散らせば、これをこの娘の十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふてはゐず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、有がたうございますと掻きさらつて行くうしろ姿、十九にしては更けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪るい事を仰しやるとてお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたたくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品さへ頂けば何よりと帯の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには写真をくれとねだる、この次の土曜

日に来て下されば御一処にうつしませうとて帰りかかる客をさのみは止めもせず、うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失礼を致しました、またのお出を待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつさつと立つて階段を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ、菊の井のお力は鋳型に入つた女でござんせぬ、又形のかはる事もありまするといふ、旦那お帰りと聞て朋輩の女、帳場の女主もかけ出して唯今は有がたうと同音の御礼、頼んで置いた車が来しとて此処からして乗り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝義の余光としられて、後には力ちやん大明神様これにも有がたうの御礼山々。

三

客は結城朝之助とて、自ら道楽ものとは名のれども実体なる処折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なればにやこれを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何処となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、力ちやんお楽しみであらうね、男振はよし気前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、その時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少し気をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廃めにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たらどうだら

う気違ひになるかも知れないとて冷評もあり、ああ馬車にのつて来る時都合が悪るいから道普請からして貰いたいね、こんな溝板のがたつく様な店先へそれこそ人がらが悪くて横づけにもされないではないか、お前方ももう少しお行義を直してお給仕に出られるやう心がけておくれとずばずばといふに、ヱヱ憎くらしいそのものいひを少し直さずは奥様らしく聞へまい、結城さんが来たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るよりこんな事を申てゐまする、どうしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は真面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの厳命、ああ貴君のやうにもないお力が無理にも商売してゐられるはこの力と思し召さぬか、私に酒気が離れたら坐敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々々とて結城は二言といはざりき。

　或る夜の月に下坐敷へは何処やらの工場の一連れ、丼たいて甚九かつぽれの大騒ぎに大方の女子は寄集まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人ぎりなり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、お力はうるささうに生返事をして何やらん考へてゐる様子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いいゑ、血の道か、いいゑ、それでは何だと聞かれて、どうも言ふ事は出来ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないかどんな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病気だといふに、病気ではござんせぬ、唯こんな風になつてこんな事を

思ふのですといふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさよしんば作り言にしろ、かういふ身の不幸だとか大底の女はいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなしその位の事を発表しても子細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩に探ぐらせても知れた事、聞かずとも知れてゐるが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつてもつまらぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

　折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打してともかくも下までお出よといふ、いや行きたくないからよしておくれ、今夜はお客が大変に酔ひましたからお目にかかつたとてお話しも出来ませぬと断つておくれ、ああ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかへ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら御遠慮には及ばない、逢つて来たら宜からう、何もそんなに体裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふが宜い、何なら此処へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいからといふに、串談はぬきにして結城さん貴君に隠くしたとて仕方がないから申ますが町内で少しは巾もあつた蒲団やの源七といふ人、久しい馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまいまいつぶろの様になつていまする、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではなけれど、縁がある

か未だに折ふし何のかのといつて、今も下坐敷へ来たのでござんせう、何も今さら突出すといふ訳ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず帰した方が好いのでござんす、恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござりますとて、撥を畳に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと嬶る、ああもう帰つたと見えますとて茫然としてゐるに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあそんな処でござんせう、お医者様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つてゐるに、御本尊を拝みたいな俳優で行つたら誰れの処だといへば、見たら吃驚でござりませう色の黒い背の高い不動さまの名代といふ、では心意気かと問はれて、こんな店で身上はたくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、それにお前はどうして逆上せた、これは聞き処と客は起かへる、大方逆上性なのでござんせう、貴君の事をもこの頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥様のお出来なされた処を見たり、ぴつたりと御出のとまつた処を見たり、まだまだ一層かなしい夢を見て枕紙がびつしよりに成つた事もござんす、高ちやんなぞは夜る寐るからとても枕を取るよりはやく鼾の声たかく、宜い心持らしいがどんなに浦山しうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴へてそれはそれは色々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察してゐて下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人前ばかりの大陽気、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、苦労といふ事はしるまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもいふものか私が身位か

なしい者はあるまいと思ひますとて潜然とするに、珍らしい事陰気のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末をしらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど実があらば奥様にしてくれろ位いひそうな物だに根つからお声がかりも無いはどういふ物だ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商売を嫌だと思ふなら遠慮なく打明けばなしを為るが宜い、僕は又お前のやうな気では寧気楽だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに、それでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずは承りたい物だといふに、貴君には聞いて頂かうとこの間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ、何故々々、何故でもいけませぬ、私が我まま故、申まいと思ふ時はどうしても嫌やでござんすとて、ついと立つて椽がはへ出るに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろす町にからころと駒下駄の音さして行かふ人のかげ分明なり、結城さんと呼ぶに、何だとて傍へゆけば、まあ此処へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つばかりの、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよくよく憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあそんな悪者に見えまするかとて、空を見あげてホツと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。

四

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさされぬ窮

屈さに、足もととては処々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、両側に立てたる棟割長屋、突当りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手の仕合は三尺ばかりの椽の先に草ぼうぼうの空地面、それが端を少し囲つて青紫蘇、ゑぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が処縁の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の裕衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針のつぎ当、狭帯きりりと締めて蝉表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての勉強せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、しばしの手数も省かんとて数のあがるを楽しみに脇目もふらぬ様あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて来ぬ、源さんも又何処を歩いてゐるかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦労らしく目をぱちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の椽に持出し、拾ひ集めの杉の葉を冠せてふうふうと吹立れば、ふすふすと烟たちのぼりて軒場にのがれる蚊の声悽まじし、太吉はがたがたと溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて来たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかとどの位案じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立てて源七は元気なくぬつと上る、おやお前さんお帰りか、今日はどんなに暑かつたでせう、定めて帰りが早からうと思うて行水を沸かして置ました、ざつと汗を流したらどうでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あい

と言つて帯を解く、お待お待、今加減を見てやるとて流しもとに盥を据へて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さんこの子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと為てお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つてゐますからといふに、おおさうだと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、そぞろに昔しの我身が思はれて九尺二間の台処で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手伝ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、ああつまらぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん脊中洗つておくれと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も気をつくるに、おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしさばさばの裕衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帯まきつけて風の透く処へゆけば、妻は能代の膳のはげかかりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小丼に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか台より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよい」は底本では「よつちよいよつちよい」」と担ぎ出す、坊主は我れが傍に来いとて頭を撫でつつ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覚えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとて茶椀を置けば、そんな事があります物か、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、気合ひでも悪うござんすか、それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何処も何とも無いやうなれど唯たべる気にならぬといふに、妻は悲しさうな目をしてお前さん又例のが起りましたらう、それ

は菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出した処が何となりまする、先は売物買物お金さへ出来たら昔しのやうに可愛がつてもくれませう、表を通つて見ても知れる、白粉つけて美い衣類きて迷ふて来る人を誰れかれなしに丸めるがあの人達が商売、ああ我れが貧乏に成つたから搆いつけてくれぬなと思へば何の事なく済ましよう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を残らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に悪るい事が染みて終ひには土蔵やぶりまでしたさうな、当時男は監獄入りしてもつそう飯たべていやうけれど、相手のお角は平気なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌してゐまする、あれを思ふに商売人の一徳、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは気を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私もこの子もどうする事もならで、それこそ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて囲うたら宜うござりましよう、もうそんな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰気らしう沈んでしまいましたといふに、みれば茶椀と箸を其処に置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず気になる様子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いや我れだとてその様に何時までも馬鹿ではいぬ、お力

などと名ばかりもいつてくれるな、いはれると以前の不出来しを考へ出していよいよ顔があげられぬ、何のこの身になつて今更何をおもふ物か、食がくへぬとてもそれは身体の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分にやつてくれとて、ころりと横になつて胸のあたりをはたはたと打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の暑げなり。

五

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何処にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘へる声も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は手打々々あわわの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをおくれと手を出したる物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に真からの涙をこぼして、聞いておくれ染物やの辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まわして、見たくもない往来へまで担ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた了簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも拵へる仕覚をしておくれと逢ふ度に異見をするが、その時限りおいおいと空返事して根つから気にも止めてはくれぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは目の悪るい人だから心配をさせないやうに早く締つてくれれば宜いが、

私はこれでもあの人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つてゐるに、あんな浮いた心では何時引取つてくれるだらう、考へるとつくづく奉公が嫌やになつてお客を呼ぶに張合もない、ああくさくさするとて常は人をも欺す口で人の愁らきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、ああ今日は盆の十六日だ、お焔魔様へのお参りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顔してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のある親をば持つてゐるのであろ、私が息子の与太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何処へ行つてどんな事して遊ばうとも定めし人が羨しかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母はこんな身になつて恥かしい紅白粉、よし居処が分つたとてあの子は逢ひに来てもくれまじ、去年向島の花見の時女房づくりして丸髷に結つて朋輩と共に遊びあるきしに土手の茶屋であの子に逢つて、これこれと声をかけしにさへ私の若く成しに呆れて、お母さんでござりますかと驚きし様子、ましてやこの大島田に折ふしは時好の花簪さしひらめかしてお客を捉らへて串談いふ処を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蝋燭やに奉公してゐまする、私はどんな愁らき事ありとも必らず辛抱しとげて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に楽をばお為せ申ます、どうぞそれまで何なりと堅気の事をして一人で世渡りをしてゐて下され、人の女房にだけはならずにゐて下されと異見を言はれしが、悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の台処を這ふも柔弱の身体なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の楽なれば、こんな事して日を送る、夢さら浮

いた心では無けれど言甲斐のないお袋とあの子は定めし爪はじきするであらう、常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕ぐむもあるべし、菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる子細あればこそ此処の流れに落こんで嘘のありたけ串談にその日を送つて、情は吉野紙の薄物に、蛍の光ぴつかりとするばかり、人の涕は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他処目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたたまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに根生のしつかりした、気のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蛛の糸のはかない処を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何処の店にも客人入込みて都々一端歌の景気よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の国、自まんも恐ろしき胴間声に霞の衣衣紋坂と気取るもあり、力ちやんはどうした心意気を聞かせないか、やつたやつたと責められるに、お名はささねどこの坐の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんややんやと喜ばれる中から、我恋は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにああ私は一寸無礼をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何処へゆく何処へゆく、逃げてはならないと坐中の騒ぐに照ちやん高さん少し頼むよ、直き帰るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出しが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

　お力は一散に家を出て、行かれる物ならこのままに唐天竺の果までも行つてしまいたい、あ

あ嫌だ嫌だ嫌だ、どうしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められてゐるのかしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄かかつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声をそのまま何処ともなく響いて来るに、仕方がないやつぱり私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落ておしまいなされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、どうで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為るだけの事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれてしまう、ゑゑどうなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情しらず義理しらずかそんな事も思ふまい、思ふたとてどうなる物ぞ、こんな身でこんな業体で、こんな宿世で、どうしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦労するだけ間違ひであろ、ああ陰気らしい何だとてこんな処に立つてゐるのか、何しにこんな処へ出て来たのか、馬鹿らしい気違じみた、我身ながら分らぬ、もうもう皈りませうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を気まぎらしにとぶらぶら歩るけば、行かよふ人の顔小さく小さく擦れ違ふ人の顔さへも遥とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがりゐる如く、がやがやといふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞な

されて、人の声は、人の声、我が考へは考へと別々に成りて、更に何事にも気のまぎれる物なく、人立おびただしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、気にかかる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのにと覚束なく、気が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとて肩を打つ人あり。

六

十六日は必らず待まする来て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不図出合て、あれと驚きし顔つきの例に似合ぬ狼狽かたがをかしきとて、からからと男の笑ふに少し恥かしく、考へ事をして歩いてゐたれば不意のやうに惶ててしまいました、よく今夜は来て下さりましたと言へば、あれほど約束をして待てくれぬは不心中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言訳は後にしまするとて手を取りて引けば弥次馬がうるさいと気をつける、どうなり勝手に言はせませう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、お力の中座をしたるに不興して喧しかりし折から、店口にておやお皈りかの声を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法があるか、皈つたらば此処へ来い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階の座敷へ結城を連れあげて、今

夜も頭痛がするので御酒の相手は出来ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に酔ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んでその後は知らず、今は御免なさりませと断りを言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店ものの白瓜がどんな事を仕出しませう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、来るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて気が変つてゐまするほどにその気で附合てゐて下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つたを未だに見た事がない、気が晴れるほど呑むは宜いが、又頭痛がはじまりはせぬか、何がそんなに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つては悪るい事かと問はれるに、いゑ貴君には聞て頂きたいのでござんす、酔ふと申ますから驚いてはいけませぬと嫣然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。

　常にはさのみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き処より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威厳の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈あげて頸足のくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつとりしてゐると問はれて、貴君のお顔を見てゐますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おお怕いお方と笑つてゐるに、串談はのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかととふ、何しに降つて湧いた事もなければ、人との紛雑などはよし有つたにしろそれは常の事、気にもかからねば何しに物を思ひませ

う、私の時より気まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心がらの浅ましい訳がござんす、私はこんな賤しい身の上、貴君は立派なお方様、思ふ事は反対にお聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其処ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は残らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑む事さかんなり。

何より先に私が身の自堕落を承知してゐて下され、もとより箱入りの生娘ならねば少しは察してもゐて下さろうが、口奇麗な事はいひますともこのあたりの人に泥の中の蓮とやら、悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、私が処へ来る人とても大底はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、それが私は出来ませぬ、それかと言つて来るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、いとしいの、見初ましたのと出鱈目のお世辞をも言はねばならず、数の中には真にうけてこんな厄種を女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、それが私は分りませぬ、そもそもの最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかからねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたらどうでござんしよか、持たれるは嫌なり他処ながらは慕はしし、一ト口に言はれたら浮気者でござんせう、ああこんな浮気者には誰れがしたと思召、三代伝はつての出来そこね、親父が一生もかなしい事でござんしたとてほろり

とするに、その親父さむはと問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば読んだ人でござんす、つまりは私のやうな気違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出来したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つておりました、私の父といふは三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど、気位たかくて人愛のなければ贔負にしてくれる人もなく、ああ私が覚えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古袷衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私にさる物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端たのお銭を手に握つて米屋の門までは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて手も足も亀かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく転ける機会に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらざらと翻れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれどこれをば何として拾はれませう、その時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげて家には帰られず、立てしばらく泣いていたれどどうしたと問ふてくれる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近処に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げてしまひましたろ、話しは誠の百分一、私はその頃から気が狂つたの

でござんす、皈りの遅きを母の親案じて尋ねに来てくれたをば時機に家へは戻つたれど、母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る物もなく、家の内森として折々溜息の声のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日断食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ひの手巾かほに押当てその端を喰ひしめつつ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。

顔をあげし時は頬に涙の痕はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私はその様な貧乏人の娘、気違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜もこんな分らぬ事いひ出してさぞ貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話しはやめまする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽気にしませうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はあ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましてから一週忌の来ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるでは無けれど細工は誠に名人と言ふても宜い人で御座んした、なれども名人だとて上手だとて私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出来ないので御座んせう、我身の上にも知られまするとて物思はしき風情、お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑゝツと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つてゐるに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれやれとあるに、あれそのやうなけしかけ詞はよし

て下され、どうでこんな身でござんするにと打しほれて又もの言はず。

今宵もいたく更けぬ、下坐敷の人はいつか帰りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて帰り支度するを、お力はどうでも泊らするといふ、いつしか下駄をも蔵させたれば、足を取られて幽霊ならぬ身の戸のすき間より出る事もなるまじとて今宵は此処に泊る事となりぬ、雨戸を鎖す音一しきり賑はしく、後には透きもる燈火のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡査の靴音のみ高かりき。

七

思ひ出したとて今更にどうなる物ぞ、忘れてしまへ諦めてしまへと思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一処に蔵前へ参詣したる事なんど思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事に出る張もなく、お前さんそれではならぬぞへと諫め立てる女房の詞も耳うるさく、エエ何も言ふな黙つてゐろとて横になるを、黙つてゐてはこの日が過されませぬ、身体が悪るくば薬も呑むがよし、御医者にかかるも仕方がなけれど、お前の病ひはそれではなしに気さへ持直せば何処に悪い処があろう、少しは正気になつて勉強をして下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出来て気の薬にはならぬ、酒でも買て来てくれ気まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さんそのお酒が買へるほどなら嫌やとお言ひなさるを無理に仕事に出て下

されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五銭が関の山、親子三人口おも湯も満足には呑まれぬ中で酒を買へとは能く能くお前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精霊さまのお店かざりも拵へくれねば御燈明一つで御先祖様へお詫びを申てゐるも誰が仕業だとお思ひなさる、お前が阿房を尽してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しはあの子の行末をも思ふて真人間になつて下され、御酒を呑で気を晴らすは一時、真から改心して下さらねば心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる心根の愁さ、その身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲けし我れに心かぎりの辛苦をさせて、子には襤褸を下げさせ家とては二畳一間のこんな犬小屋、世間一体から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が来ればとて、隣近処に牡丹もち団子と配り歩く中を、源七が家へは遣らぬが能い、返礼が気の毒なとて、心切かは知らねど十軒長屋の一軒は除け物、男は外出がちなればいささか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひもするを、それをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつづけ、無情き人の心の底がそれほどまでに恋しいか、昼も夢に見て独言にいふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはててお力一人に命をも遣る心か、浅ましい口惜しい愁らい人と思ふに中々言葉は出ずして恨みの露を目の中にふくみぬ。

物いはねば狭き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたどたどしきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそいそと帰り来る太吉郎の姿、何やらん大袋を両手に抱へて母さん母さんこれを貰つて来たと莞爾として駆け込むに、見れば新開の日の出やがかすていら、おやこんな好いお菓子を誰れに貰つて来た、よくお礼を言つたかと問へば、ああ能くお辞儀をして貰つて来た、これは菊の井の鬼姉さんがくれたのと言ふ、母は顔色をかへて図太い奴めがこれほどの淵に投げ込んで未だいぢめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かしに遣しおる、何といふて遣したと言へば、表通りの賑やかな処に遊んでゐたらば何処のか伯父さんと一処に来て、菓子を買つてやるから一処にお出といつて、我らは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つてくれた、喰べては悪るいかへとさすがに母の心を斗りかね、顔をのぞいて猶予するに、ああ年がゆかぬとて何たら訳の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者にした鬼ではないか、お前の衣類のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べても能いかと聞くだけが情ない、汚い穢いこんな菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨てしまいな、捨ておしまい、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて転び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初と一声大きくいふに何か御用かよ、尻目にかけて振むかふともせぬ横顔を睨んで、能い加減に人を馬鹿にしろ、黙つてゐれば能い事にして悪

口雑言は何の事だ、知人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪るい、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけに我れへの当こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女房気質を誰れが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだましは知れてゐれど、妻たる身の不貞腐れをいふて済むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の権がある、気に入らぬ奴を家には置かぬ、何処へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めと叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に当つけよう、この子が余り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とツこに取つて出てゆけとまでは惨う御座んす、家の為をおもへばこそ気に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどならこんな貧乏世帯の苦労をば忍んではゐませぬと泣くに貧乏世帯に飽きがきたなら勝手に何処なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の延ばされぬ事はなし、明けても暮れても我れが店おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭やに成つた、貴様が出ずば何ら道同じ事をしくもない九尺二間、我れが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそんなら真実に私を離縁する心かへ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

　お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涕を呑込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、お力が親切で志してくれたものを捨てしまつたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、

決してお力の事につきてこの後とやかく言ひませず、蔭の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てて来た者なれば、離縁されての行き処とてはありませぬ、どうぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうとこの子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤどうしても置かれぬとてその後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ体、これほど邪慳の人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるればこれほどまでも浅ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂ひには可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覚悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何処が好い、言ふて見ろと言はれて、我らはお父さんは嫌い、何にも買つてくれない物と真正直をいふに、そんなら母さんの行く処へ何処へも一処に行く気かへ、ああ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれどこの子はお前の手には置かれぬ、何処までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何処へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、どうなりともしろとて寝転びしまま振向んともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいままの道楽なり何なりお尽しなされ、もういくらこの子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探ぐつて何やらの小風呂敷取出し、これはこの子の寝間着の袷、はらがけと三

尺だけ貰つて行まする、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、よく考へて見て下され、たとへどのやうな貧苦の中でも二人双つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れれば片親、何につけても不憫なはこの子とお思ひなさらぬか、ああ腸が腐た人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげて表へ出れば、早くゆけゆけとて呼かへしてはくれざりし。

八

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕にて一つはさし担ぎにて、駕は菊の井の隠居処よりしのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、あの子もとんだ運のわるいつまらぬ奴に見込れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをしてゐたといふ確かな証人もござります、女も逆上てゐた男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の帰りに男に逢ふたれば、さすがに振はなして逃る事もならず、一処に歩いて話しはしてもゐたらうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる処を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲団やの時代からさのみの男と思はなんだがあれこそは死花、ゑらさうに

見えたといふ、何にしろ菊の井は大損であらう、かの子には結搆な旦那がついた筈、取にがしては残念であらうと人の愁ひを串談に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ。

青空文庫情報

底本：「にごりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社
1949（昭和24）年6月30日発行
2003（平成15）年1月10日116刷改版
2008（平成20）年6月10日128刷
初出：「文芸倶楽部」
1895（明治28）年9月号
※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。
「にごりえ」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）
※底本巻末の編者による語注は省略しました。
入力：酔いどれ狸
校正：岡村和彦
2014年11月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）で作られまし

た。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

にごりえ

樋口一葉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/